



「<sup>あま</sup>天の海に雲の波立ち 月の船 星の林に<sup>こ</sup>傍ぎ<sup>かく</sup>隠る<sup>み</sup>見ゆ」（万葉集）・・・月周回衛星『かぐや』を打ち上げた JAXA のサイトに紹介されていた柿本人麻呂の歌です。7月7日の夜は越谷周辺ではあいにく天の川の観察が難しかったようですが、市内のあちこちには願い事を書いた短冊がつるされた笹竹が飾られていました。

## 稲の虫 ホ～イホイ

市内北川崎地区で今も行われている“虫追い”が、今年も7月24日（水）午後7時から行われます。それに使うための松明作りが、6日（土）午前川崎神社境内で行われました。

虫追いはかつては市域の旧村毎に行われていましたが、今では県内でもこの北川崎地区だけとなっており、埼玉県指定無形民俗文化財に指定されています。

**材料と作り方** 松明は竹の棒を芯にして周りに麦藁を巻きつけて作ります。点火する上の部分が太くなるように麦藁を巻き、荒縄で30cm くらいの間隔でしっかり締めて結びます。作業に慣れた60～70歳代の何人かが作り方を実演しながら説明する時、子どもたちは周りを取り囲んで熱心に見ていました。その中の一人が「この藁ってどこからとってくるの?」と、傍らの母親に尋ねていました。古老が語るには、現在は幸手や杉戸の麦作農家から軽トラック5台分を頂いてくるそうです。



4mほどの松明。三〇センチ間隔で縛った縄の結び目は同じ方向を向いています。松明が燃えていくにしたがって、結び目は片手で外せるようになっていきます。



虫追い当日、神社の灯明から移した火をここに点けます。

## 消滅の危機を乗り越えて

子どもの頃からこの地域で虫追いに関わってこられた60歳代以上の方々にお話を伺いました。代々農業を営んでこられた生活の風情のある越ヶ谷の言葉で、様々なことを語っていただきました。その中には虫追いの伝統が消えてしまいそうな時期もあったという話もありました。

昭和50年頃、麦藁がなくなって、空き缶にろうそく灯してやったことあったっけな。虫追い、なくなるとこだった。

何とか雨があがってよかった。この日は昔から雨に降られたこと、ねえんです。

そうだったな。市や県の人々が来て、何とか頑張ってくれて・・・

小学校から松明作り呼びかけの手紙が来て、子供たちがやりたいと。

嫁に来た55年くらい前は、各戸で一本、4、5mの松明作ったもんだよ。昭和38年ころまではこらでも麦作ってたから。田んぼが終わってから（稲刈りの後）麦蒔いて、冬は麦踏みして・・・

「文化」というのは損得ではなく、賛同してもらえるようにしていかなければならねえんですよ。

農薬がたくさん使われる前は、虫追いの明るる朝の田んぼには、虫がいっぱい落ちてたよ。



# 本番のことを思って参加しました

この日参加した小中学生は30数名。大人と同じくらい的人数でした。何人かに参加の理由や感想を聞きました。

- ★ (3人兄弟妹) 学校(新方小学校)に虫追いの写真があり、面白そうだと思います。楽しかった。本番も楽しみです。(末の女の子・保育園児) お兄ちゃんのお手伝いをしました。
- ★ (小学生) 本番(虫追い当日)のことを思って参加しました。 去年初めて本番に参加して、松明を作るところからやってみたいと思いました。
- ★ (中学生) 小学生の時に初めて参加しました。縄の結び方が難しかったです。



## 継承の意義と課題

伝統行事をなぜ継承するのか・・・難しい問題です。全国各地の伝統行事を運営している人々の共通した課題です。「古くから伝わるものだから」だけでは説得力が乏しいですね。そうしたことや地域の変化により、継承を直接担う壮年層が農業から離れたり考え方に違いが出てきて、なかなか困難なところがあります。中心になって運営する人には「文化というのは損得ではなく、賛同してもらえるようにしていかなければならない」(60歳代の方の言葉)というご苦労があります。

虫追いの松明巡行では近世の村境(旧小字)だった個所に、お札(幣札)を竹に挟んだものを立てながら進みます。群馬県板倉の雷電神社と榛名山神社のお札ですが、近年では後者は久伊豆神社のお札になったそうです。雨乞いや豊作、村の安寧を祈ったものです。かつて封建制下、厳しい自然と田畑耕作を乗り越えていくために、村の人々が共同して農作業をしていかなければなりません。そういう時、人々は『結』や『模合』という相互扶助の仕組みで乗り越えてきました。“虫追い”の中には共に生きていこうとする心があつたのではないのでしょうか。

出来上がった松明に、文政二年(1820)の狛犬も満足そう。



継承の意義を捉えるヒントの一つは上記の小学生の言葉に見えるように思われます。(下線部) 火を点けた松明を持って2kmの田んぼ道を歩くだけでなく、その道具を作るところから、年配の方々の話を聞きながら

体験することは、先人たちの想いにより深く触れることとなります。その経験の蓄積はいつか自分の生き方や社会を支えることに繋がっていくかもしれません。

今回の取材では北川崎地区の皆様、新方小学校の先生方、特に自治会長さんと川崎神社氏子総代の方には多大なご協力をいただきました。大変お世話になり、有難うございました。



昨年の虫追い

# 平安時代の地面に触れた!

## 中学生の発掘体験(社会体験チャレンジ事業)

今回は遺跡の発掘体験です。平安期から江戸期までの遺構が重なっている大袋地区の大道遺跡です。7月3~4日には東中学校1年生、4~5日には北陽中学校2年生が、それぞれ7人ずつ発掘に参加しました。貴重な晴れ間にはシルバーさんや文化財ボランティアの方々のアドバイスを受けながら慎重に掘っていました。雨天の時には土器洗浄や図面作成を行いました。次のような感想が聞かれました。



- ★どうやって掘っているんだろうと思っていた。遺物は予想以上に出てこなかった。
- ★土器片が出てきた時は嬉しかった。
- ★こんな身近に遺跡があるとは思わなかった。平安時代の地面に触れたんだよと聞かされて、すごいことだと思った。
- ★東中の生徒と図面書きの競争をして楽しかった。
- ★遺物をきれいにする作業で土がどんどん落ちて元の姿に戻るのが楽しかった。

7月25日(木)に現地説明会を行います。  
詳細は生涯学習課へお問い合わせください。

生徒の実習ノートより⇒

